

これからの高校に期待される学力

上智大学教授 奈須正裕氏 講演まとめ

【学力論の2つの系譜】

- 「内容」を基盤とした学力論・・・コンテンツ・ベース ⇒ 「何を知っているか」
- 「資質・能力」を基盤とした学力論・・・コンピテンシー・ベース ⇒ 「どのような問題解決を成し遂げるか」
- ただ「知っている」だけではだめで、それを活用し、応用し、組み合わせて問題解決をしていく「使える知識にする」学力論に日本を含め世界的に移ってきている。

【資質・能力（コンピテンシー）への注目】

- 社会においては、意欲、感情の自己調整、問題解決能力、対人関係能力が必要。これを学力として再定義していこうという動き。
- 未来は子ども達の65%が現在ない仕事に就く。事務職の47%が自動化、人工知能化。機械ができるものは機械に任せ、人間にこそできる教育を目指すべきという方向が世界の動き。教育の人間化の好機と捉える。
- 育成すべき資質・能力の3つの柱
 - ・学びに向かう力、人間性・・・どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
 - ・知識・技能・・・何を理解しているか、何ができるか
 - ・思考力・判断力・表現力等・・・理解していること・できることをどう使うか
- コンピテンシーのイメージは、与えられたものを使っての思考、判断、表現。
- 価値の判断、創造、意思決定、多様な他者との共感・協働などは人間でなければできない。
- 大学入試では、今まで知識・技能に偏りがちだった日本の教育内容を同列で評価し、入試に活用し学力転換を図っている。秋の入試はコンピテンシーを見ている。入学後の追跡調査でも一般入学生との差はない。
- ICTの日常的な活用を進め、生徒が文房具として学び考えるための「道具」とすることが大切。
- ただ持っている知識と使える知識の違いを理解し、知識の質を変えていくことから生まれる「オーセンティックな学び」が重要である。

【「網羅」から「看破」へ】

- 「網羅」と「看破」
 - ・網羅する学習 ⇒ 個々のコンテンツをバラバラに列挙する (coverage learning)
例：歴史の細かい事実は沢山知っているが、因果関係は知らない。
 - ・看破する学習 ⇒ 一つ一つの事ではなく、その奥にあるもの、見方・考え方が見える (uncoverage learning)
例：歴史がどんな経緯で動いているかがわかっている。
- 多くの事を知っているという学びから、何故そうなのかということを見通せる授業に今後変わっていく。フランスのある地域の高校では歴史の授業で20世紀の出来事しか扱わないが、「問い」を立てながら学習を進めるため、世界情勢を読み解き、意見し、行動できる。

【探究的で教科等横断的な学び】

- 学びの状況を本物にしていくと、教科を越え、教室を出る学びに変わっていく。
- 探究的な学びにより、より深いことが分からなくなり、また深く問うことになる。それにより、深く問う力が育つ。更に深めていくことにより人間にとってさらに大事なことに気づくようになる。

【何を取り、何をあきらめるか？】

- 何かを取ることは何かを諦める事でもある。新校に想定されているヒト・モノ・コトといったリソースを目標に対していかに効果的に使うか。従来行ってきたものの何かを捨てざるを得ないのではないか。従来の学校にあった当たり前を当たり前と考えない。
- 地域の協力があるのなら、部活動を社会教育に移行することなども考えられる。
- 学力の質の豊かさを実現するには、内容減、丸暗記をなくすなど、少なく教えて豊かに学ぶことが大切。「そんなことも知らない」けれど、多様な考えを持ち、表現し、協力できることを受容していることが大切になる。網羅的な知識習得を断念する覚悟をとることも必要。